

研究報告
(研究プロジェクト)

メダリストへの軌跡 —森田淳悟 選手—

福井 元 (スポーツ史研究室)

神田 俊平 (スポーツ文化・社会科学系)

【経歴】

1966年4月 日本体育大学体育学部体育学科入学
1970年4月 日本鋼管入社 (現JFEスチール)
1981年4月 日本体育大学バレーボール部コーチ
1983年4月 日本体育大学助手
1987年4月 日本体育大学講師
1993年4月 日本体育大学助教授
2000年4月 日本体育大学教授
2015年4月 日本体育大学特任教授
2018年4月 日本体育大学名誉教授

【競技歴】

1966年 第6回世界選手権大会 第5位
1968年 オリンピックメキシコ大会 銀メダル
1970年 第7回世界選手権大会 第3位
1972年 オリンピックミュンヘン大会 金メダル
1977年 ワールドカップ 第2位
2003年 国際バレーボール連盟 殿堂入り

本稿は、「研究プロジェクト：日体大とオリンピックの関わり」の一環として実施した、メダリストへのインタビューをもとに構成されている。

本インタビューは、平成31年1月8日(火)に、日本体育大学 東京・世田谷キャンパスにて森田淳悟氏にお話を伺ったものである。

1. 競技との出会い

それまでは、野球や陸上の走高跳をしていた森田氏がバレーボールと初めて出会ったのは、高校生の時であった。将来を見越し、大学の付属高校に狙いを定め受験したのは東海大学の付属高校と、日本大学の付属高校である日大鶴ヶ丘高校で

ある。そのうち日大鶴ヶ丘高校の入試の時に、身長が188cmあった中学3年生の森田氏は同校の見知らぬ上級生に声を掛けられる。上級生が連れて行った先には、当時同校のバレーボール部顧問であった原田先生がおり、「よし、おまえ。背が高いからバレーをやれ」という一言がバレーボールと森田氏の出会いのきっかけである。その後、め

でたく両方の高校に合格し、進路を日大鶴ヶ丘高校に決めることになるが、その理由もバレーボールではなく、当時は日本大学の方が東海大学よりも有名だったからということが理由だそうである。

高校に入学し、校内での運動部の勧誘が行われる中、排球部の文字を見て森田氏は面接の時の一件を思い出す。そして排球部の机に近づくと、新入部員の名前に“森田淳悟”という文字を見つけ、驚きと同時に困ったという思いもあったが、他の競技にこだわりがあったわけでは無かったので、排球部への入部を決定したのであった。これが森田氏とバレーボールの出会いである。トップレベルのスポーツ選手としては現在では考えられないほど遅い競技との出会いであった。

しかし、いざ部活動になってみると、ルールも知らず最初は球拾いばかりのスタートであった。「バレーボールをやったことがなくても大丈夫、俺がうまく教えてやるから。」と言った原田監督は何も教えてくれず、暫くは球拾いの毎日であった。そしてようやく入学してから2～3か月たった頃から同校OBの大学生からバレーボールの基本を教わったのである。レシーブ、パスとメキメキと技術を向上させた森田氏は、夏休み前にはスパイクを打つまでに成長する。そしてここでも耳を疑うような一言が原田監督から発せられたのであった。「おまえ、東京都の合宿に行ってみて来い」である。原田監督はバレーボールを始めてわずか3か月の高校1年生を、1964年のオリンピック東京大会の候補選手が集まる合宿に参加させたのであった。この合宿で他の選手達のトスやスパイクの速さなど異次元のバレーボールを経験するが、一流のプレーヤー達と共に脱落することなく合宿を終えると、森田氏はバレーボールに対する自信を得ることになる。森田氏はこの経験から、自分の持つレベルの上の世界を経験することは、自身のレベルアップに大いに役立つということを肌で学ぶのであった。十両の力士が十両の世界で満足すると、いつまでたっても十両止まりであるが、

少し尻をたたき一つ上の世界を経験させると選手は遅くなって帰ってくるという考えである。森田氏は後に指導者になった時に、良くその方法を行ったという。

バレーボールを始めて2年目の1964年は、オリンピック東京大会が行われる年であった。その年の夏休みに原田監督から「高校全日本の合宿に行ってみて来い」という言葉が発せられ合宿に参加することになる。この全日本というのは、インターハイや国体に出場が条件となっていたが、森田氏は高校時代に全国大会には出場したことが無く、ただただ驚くばかりであった。先に述べたようにこの年はオリンピックが日本で開催される年であったため、この高校選抜のチームは、オリンピックに参加する外国チームの練習相手を務めることになるのであった。外国人と練習試合を行い、スピード、高さ、パワー、そしてテクニックに圧倒されるのであるが、自分のレベル以上のバレーボールを経験させられ、当時はバレーボールに嫌気がさすような気持ちになることもあった。

しかし高校3年生の冬になると、正式に日本代表候補に選出されるが、よく考えてみると森田氏がバレーボールを始めてから、わずか3年足らずでの選出となっており驚きを隠せない。この選出の裏には実のところバレーボールのルールの改正が深く関係している。オリンピック東京大会が終わり、ブロックの時のオーバーネットが可能になった。それまでは同じプレーがオーバーネットとなり反則になっていたが、森田氏はオーバーネット気味のブロックを得意としており、このルールの改正からバレーボールが楽しくなってきたと語っている。このプレーで頭角を現したことから、同じ東京都の強豪である中大杉並高校（現中大附高）の中村監督の目に留まり、中大杉並の練習に良く呼ばれたそうである。このように最初は中大杉並の強化の為に呼ばれたと考えられるが、その出会いから当時の日本代表の松平監督に話が伝わり、高校3年生の1月に日本代表に呼ばれることに繋がった。このような濃密な経験から、

バレーボールを3年間やり通し、その後に繋がる土台を作る高校時代であった。

2. 日体大の思い出（選手生活の思い出）

節目節目で大胆な発言をしていた原田監督であったが、森田氏が日体大へ進学するきっかけもやはり原田監督からの「森田、おまえ日体大へ行かないか」という一言からであった。原田監督は日体大の出身であり、バレーをするなら日体大でと、日体大への進学を進められるのであった。しかし、先述の通り高校生で日本代表に選出されている選手であり、進路に関しては引く手数多であった。慶應、明治、立教、日大などからの誘いもあったそうだが、日体大に進学した要因を伺うと、学業にもしっかりとした考えを持っていた森田氏の父親を原田監督が説得したことが大きいそうである。こうして進路は日体大に絞られたが、もう一つ障壁が待っていた。それは内申書である。大学受験を経験した者なら誰もが知っているが、現在も受験には必ず必要な書類である。森田氏は日大鶴ヶ丘高校という日本大学の付属高校に通っていた。当時は高校入学時に他大学には進学しない旨の書類が存在していた為内申書を発行できないという事態に陥った。しかし当時の日体大の栗本学長は、同窓生の推薦があり、バレーボールを頑張っている生徒を無下にできないと大らかな考えで、受験を許可したという。この一件について森田氏が退職される際に冗談交じりで松浪理事長から、日体大の学生で唯一内申書が無い卒業生であると紹介されたそうである。

無事入試（当時は特待及推薦入学は無い）を突破し大学生活が始まるのであるが、日本代表と、日体大バレー部という2つのチームに所属することになった。当時の日体大の監督は中田監督、原田監督同様に基礎を大切にされる方であった。しかし、初めての大学生活ということで大変な日々を送ることになる。合宿所の掃除の為5時に起床、大学の授業を受け16時過ぎから大学バレー部で

の練習。バレーボールと言えば一般的に体育館で行う競技と考えられるが、当時のこの時間帯は男・女隔日の交互でやる屋外の土のコートでの練習であった。その後18時過ぎから体育館での練習になり、20時半からは場所を移動して日本代表としての練習があり、合宿所に戻るのが夜中の1時過ぎになるというのが、平均的な1日の流れであった。この日本代表としての練習というのは、正式なものではなく、松平監督から指名された選手が行う夜間練習であった。そのため、それに加え1年間の半分の期間がオリンピックに向けた正式な全日本の合宿であったそうである。さらに合宿所では上級生の掃除や洗濯、炊事などもあり、まさに目の回るような日々であった。

このような大学生活を送っていた森田氏は大学3年次にオリンピックメキシコシティー大会に出場することになるのだが、その直前に人生を左右する出来事に巻き込まれることになる。1968年の8月、全日本チームはヨーロッパに遠征をし、その道中チェコスロバキアでの試合後の事であった。チェコスロバキアの民主化運動、いわゆる“プラハの春”に対する当時のソ連を中心としたワルシャワ条約機構軍による軍事介入が、まさしく滞在中に起こったのである。チェコスロバキアでの試合を終え、プラチスラバ（現スロバキアの首都）からプラハへの移動を控えていた明け方の事であった。上空には戦闘機が旋回し、陸上からは戦車が侵攻しようとする中、予定を変更し早朝4時に日本選手団はオーストリアとの国境を目指すことになる。そのバスにはチェコスロバキアの選手やスタッフも乗っていたが、その目的は彼ら自身の避難ではなく、大切な客を送り届けるというものであった。母国が大変な状況下にあるにも関わらずこのような行動から、ナショナルチームの一員としてのプライドや、人間として何が重要であるかという事を学び、この体験からバレーボール選手としてだけではなく人間として大きく成長したと森田氏は述べている。このようなドタバタの出国劇となった為、当時のパスポートにはチェ

コスロバキアを出国したスタンプは押されていないそうである。

この2か月後にいよいよオリンピックメキシコシティ大会である。心配されたチェコスロバキアの選手たちも、誰一人欠けることなく参加し再会を喜んだそうである。試合となるとチェコスロバキアから2セットを先取するものの残りのセットを落とし逆転負け。最終的な森田氏にとって初めてのオリンピックの結果はというと、7勝2敗で勝点16の2位となり、金メダルでは無かったものの銀メダルを獲得した。

3. オリンピックでのメダル獲得

銀メダルを獲得し日体大に戻るようになるが、当時の日体大は森田氏のワンマンチームであった。この頃のリーグ戦は土日の連戦で同じ大学と戦うが、ワンマンと述べた通り2日間で森田氏が打ったアタックの数は500本にもなっていた。打とうとするとブロックが来る。何とかしてブロックを外す方法を考えなければならぬと考え、クイックの練習を行っていた。そんな矢先、下級生のセッターが通常の高いトスを上げてしまい、中田監督がその場に居たため打たないと怒られると思い、タイミングをずらしてジャンプしボールを打ったらブロックがなかったそうだ。そのプレーからアイデアが閃き、アレンジをし“一人時間差攻撃”という世紀の大発見は20分程度で完成した。このようなバレーボールの常識からは逸脱したプレーが生まれたのは、日体大チームと全日本でのクリエイティブな考えのお陰でもある。中田監督は基礎を重視するものの、プレーの発想に関しては自由度の高い指導者であったそうである。さらにこのことに関しては日本代表の松平監督も同様「どんなバカなものでもいいから、何か新しい技を考えろ」とよく言っていたそうだ。

その後新たな技を身に着けた森田氏は、全日本合宿にて松平監督に一人時間差攻撃を披露するとすぐに採用。ステップを変えるなどアレンジし4

種類の一人時間差攻撃が完成する。しかしこのプレーは国内限定とされ外国のチーム相手には封印されるのであった。もちろん大学生との試合では一人時間差を使用し、日体大の勝利に貢献したことに加え、プレーの精度を高めていった。

そしていよいよ、この一人時間差攻撃を世界にお披露目することになるのだが、意外なことにそれはオリンピックではなく1970年にブルガリアで開催された世界選手権の時であった。ようやく解禁となった一人時間差攻撃だが、この戦術は国際的には誰も知らないものであったため百発百中であった。しかし日本チームはこの大会においてそれほど一人時間差攻撃を用いず、第3位という結果に留まっていた。その理由は2年後のオリンピックミュンヘン大会への布石であったそうである。体操競技などでは大会で初めて技を見せると審判が対応できないこともあり得点が伸びないこともあるようだが、バレーボールでは狙っている大会において初めて用いるのが一番効果を得られそうである。しかし松平監督はその戦略ではなく、この世界選手権で他国を惑わすという戦略を選択した。つまり日本チームは、「他のチームでは真似ができないような複雑なコンビネーションを用いるチームである」と、他国を混乱させることを狙ったのであった。

オリンピック東京大会で銅メダル、メキシコシティ大会では銀メダルと着実にレベルアップを果たしている日本チームだが、ミュンヘン大会では金メダルを獲得することを公言し、大会に臨むことになる。公言したものの、バレーボールは競泳や陸上競技と異なりタイムなどの物差しが無い競技である。当時も日本、ソ連、東ドイツの三つ巴であった。日本は東ドイツを得意とし、ソ連を苦手としていた。このような状況のもと松平監督は金メダル獲得に向け様々な策を用いたようである。ソ連とは毎年定期戦を行い、国交のなかった東ドイツを経済界主導のもと国ではなく、ライプチヒ市の選抜チームという名のもと、日本に実質的な東ドイツのナショナルチームを招待し試合を

行うなど対策を行った。更にはミュンヘンを中心に西ドイツ国内で遠征を行い、オリンピック決勝の地の観客を味方に付けるような対策もとっていた。その他にも松平監督流の配慮があり、リラックスして競技に臨むことができたせいか、予選リーグを5戦全勝で突破し、4チームで争う決勝トーナメントに進出する。しかしこの間に、オリンピック史に残る大きな事件が起こっていた。パレスチナ武装組織による選手村を襲撃したテロ事件、いわゆる“ミュンヘンオリンピック事件”（黒い九月事件）と呼ばれる事件である。選手村の中で日本選手団の宿泊していた棟からは、直線で100mほどの距離であり、ヘリコプターの飛ぶ音も大きく聞こえていた。バレーボールを通してプラハの春に続き、命の危険に直面するような政治的な事態に遭遇し、スポーツと政治は切り離せないものだと痛感することになる。この事件によりオリンピックの開催も危ぶまれたが、わずか1日遅れで大会は継続されることになる。競技が再開されると、いよいよブルガリアとの準決勝であるが、フルセットの大接戦の末勝利する。そして決勝戦は東ドイツとの戦いである。得意としていた東ドイツとの一戦は、気の緩みからか最初のセットを落としてしまうものの、その後のセットを全て取り、ついに日本は金メダルを獲得することになった。まさしく有言実行で金メダルを獲得することになったが、ここには松平監督の果たした役割が大きい。松平監督は遠征先では、昼間にホテルの部屋で休んでいることを嫌い、街を歩くことを奨励した。さらには前もって遠征先の文化や国民性を、選手が調べるといことも行い、調べたことはバレーボールの試合中においても生かされた。バレーボールの技術や戦術ばかりでなく、相手の民族性を知る、こういうことの積み重ねが金メダル獲得に大いに役立ったと感じたことから、その後、森田氏が指導者になった時にも、このような教えを実行している。

4. その後の人生

時代は前後するが、一人時間差攻撃を世界にお披露目した1970年の3月に日本体育大学を卒業し、同年の4月からは日本鋼管に入社、以降同社のバレーボール部で活躍していた。ミュンヘン大会が終わると、金メダルを無事に獲得した安堵感と疲労感から、日本鋼管でのバレーボール部での活動に専念すると同時に、仕事にも面白さを感じていた事から、その後の全日本での活動を辞退する。しかし5年後の1977年に日本のバレー界が国際大会であまり勝てなくなってきたことから、ワールドカップの日本開催の際に代表復帰し見事準優勝という成績を収める。

その後1980年に現役を引退し、翌年日体大の中田監督からの要望もあり日体大へコーチとして復帰する。在職中には川合俊一氏、田中直樹氏、泉川正幸氏、斎藤信治氏、山本隆弘氏らを育成するなど、日体大バレーボール部の躍進に大いに貢献した。1987年には監督となりインカレでも4度の日本一に輝いている。さらにはユニバーシアードの日本代表監督としても世界一を経験するなど、指導者としても輝かしい実績を残した。また、このような戦績のみならず、高校の原田監督、大学の中田監督から学んだような人間形成にも重点を置き、優れた指導者を多く輩出している。2003年にはバレーボール国際殿堂入りを果たし、その後2010年に日体大監督を退き、教え子でもある現日体大男子バレーボール部監督の山本健之氏にバトンを渡している。

5. 後輩に一言

スポーツ選手ではなく、まずは大学生だということを再認識してほしい。スポーツ推薦で入学しているからといって、スポーツだけの“スポーツ馬鹿”で良いというわけではない。当時の日本代表の松平監督も、「バレー馬鹿にはなるな、必ず朝30分で良いから新聞を読みなさい。」と仰って

いた。教員採用試験の合格率も年々厳しくな
てきているようだが、スポーツばかりでなく学
業にも力を入れ教員として採用される学生や、
広く社会で通用する人間に成長して欲しい。



1972年朝日賞の授与式



ミュンヘンオリンピック対ブラジル戦



ミュンヘンオリンピックでのドライブサーブ